# 死闘　インパール作戦
## ―京都師団のビルマ戦記―

奈良県　森谷治作

私は昭和十五（一九四〇）年十二月一日、歩兵第二十連隊に入隊した。当日の入隊者は中支派遣第十五師団歩兵第六十七連隊要員であり、十二月二十五日、原隊追及に出発と発表された。

福知山から宇品を出て瀬戸内海を西進、東支那を通り揚子江に達し、南京軍官学校に入り第一期の教育が始まった。昭和十六年一月一日のことであった。

以来中国戦線で教育と江北の警備、作戦、討伐、泥濘の行軍、また清郷工作、初年兵教育、そして、浙韓作戦参加等中国戦線での活動でした。

そして南方作戦参加のための大移動が始まりました。昭和十八年八月二十四日夕刻、呉淞港の岸壁に着き、約二年八カ月の思い出多き支那大陸を後にして、船は静かに岸壁を離れて行きました。

上海の夜景を右に見ながら、駆逐艦と潜水艦に監視と護衛をまかせて、輸送船は東支那海を南へ向かって航行する。台湾に一日寄港した後、航海はなおも続く。そして心配していた敵の奇襲攻撃もなく、約十二日間の航海で、無事メコン河口のサンジャック岬に着きました。

二日後にサイゴン埠頭着、直ちに上陸、ここにある通過部隊の宿営舎に向かう。緑の街路樹と建造物も近代的で、市電もあり、小パリといわれる街だと感嘆しました。

軍装を解く間もなく、紺碧の空の一隅に黒い雲が見えたところ、見る見る青空を消して行くや、間もなく「バケツ」の水をぶちまけたような大雨となりました。これまでに良く聞いていた「スコール」である。皆真裸になって、石鹸とタオルを持って外へ飛び出して身体を洗いました。

そして一時間も経たない内に雨は止み、元の紺碧の空に戻ります。



夜は南十字星を仰ぎ見て、常夏の南方にある身の感触をつくづく感じました。街に出るとフランス人の男女、安南娘の花売り姿と、日本人商社の建物もあり、商社員の姿も見られます。また軍人の立入禁止地区で「ショーロン」と言う支那人街も有りました。すべて深く印象に残った「サイゴン」の風景でした。

約一カ月足らずの滞在で、幾多の思い出を残してカンボジア王国の首都プノンペンに向かって、メコン河を遡航しました。両岸に見えるゴム林、椰子林、水と緑と空高く並立つ建造物、そして宮殿など、自然と調和する素晴らしい景観でした。

約一昼夜でタイ国のバンコックへ到着しました。ここで一晩の大休止となりました。街にはセーラー服の女子学生達がいて、日本にいるかのような錯覚におちいります。

翌朝、再び屋根のない貨物列車でプノンペンに向かって行きます。座ったまま身動き出来ない位満載で、列車は石炭の代わりに薪を燃料とし、列車からは火の粉が飛び散る始末です。

このようにして目的地のタイ国の第二の都市チェンマイに到着し、ここで日本製自転車を受領しました。いよいよ自転車行軍で、兵器、弾薬、食糧等を積み込んで出発しました。しかし道路は工兵隊が速攻のため作った粗雑な山道で、受領した新車も故障が続出するようになりました。

かくして自転車は廃品に近い状態になってしまい、目的地ビルマ・メイミョーからマンダレー北部の部落まで双牛車を調達、これに弾薬、食糧等を積み、今度は双牛車輸送部隊として出発しました。

サガイン、コーリン、ウントウを経てチンドイン河の渡河地点に向かって行進しました。この道路も工兵隊の応急工事した山岳道路が多く、牛がへばって動かない。この辺で早くも敵飛行機、偵察機も飛来するようになりました。

チンドイン河も近くなって来たと感じながら、弱った牛の尻を叩くのですが双牛車は遅々として

進まない。こうしてついに目的地チンドイン河畔の手前に到着しました。

ここで荷物を降ろし、中隊の野営地に集合、弾薬、糧秣を受領し、各自一カ月分の米、味噌、醤油、カンパンを背嚢に積み込み、兵器の手入れをして、戦闘準備を完了したのですが、未だ出発の命令が出ない。皆が待ち遠しい思いでいる時、いよいよ作戦開始となり、チンドイン河の渡河は三月十五日と伝達されました。

## 一　作戦開始とアラカン山脈踏破

四時頃である。「進め」と低いが力強い号令があり、河に向かって進む。配属の工兵隊が操作する舟艇に乗り込む。合図と共に、対岸に向け全速力で進み、砂原に乗り上げ上陸する。敵前上陸である。直ちに散開し速攻に移りましたが、待ちかまえている敵の姿は無く、一発の銃声も聞くことはありませんでした。

そこで大休止の場所をさがし、休憩、服装を整えることとなりました。ふと見ると、塩の袋がある。その付近一面に掘りかえした跡が見え、敵さんのキャンプの跡とわかり、掘りかえすと魚の缶詰、練乳缶、ビスケット、砂糖、紅茶等が出てきて、皆で分けて持って行くことになりました。

いよいよここから敵を追っての、峻険なアラカン山脈踏破です。三千～五千メートルの連山に向け戦闘体制で出発しました。タナン、フミーネを通過し、三日間位歩き続けました。時折、敵の偵察機が低空で飛来し、部隊員は木陰に身をかくしながらの行軍です。

未だ敵兵との接触はありません。しかしだんだん、先行隊の戦闘の跡や、所々に敵兵の死体を見るようになりました。また、尾根近い道路を進行中、突然見えて来た前方上方で、大山火事が見えました。敵さんの放火だと身構えたのですが、これは土着民達の焼き畑農業での野焼きの火でした。しかし、その炎は火柱を立て、山肌を焦がして行く様子は見事なものでした。

夜になるとチーク林の中で休憩しました。しかし夜中になると、葉から落ちる露は大粒の雨のようで、携帯天幕をかぶっているのですが、眠られたものではないのです。夜明け前に目を醒まして見ますと、天幕はびしょ濡れです。

第十中隊の中西隊と、第十一中隊の一個小隊、里内小隊と指揮班を編成し、広岡中尉が広岡隊として今後の指揮をとることとなりました。

この間にも絶えず敵偵察機が飛来しました。出発命令が出て、一日位歩いたところ、ここがサンジャックが近い地点とのことである。ここより本田挺進隊は右方向のウクルール、ミッションに向けて前進することになりました。我々は本道に沿って西に向かって行き、サンジャックを過ぎると道路は広くなり、なだらかな下り斜面となった道路を進む。

偵察機が飛来する度に道路の両側に寄り、木陰に身をかくしながらの前進でした。

## 二　「三五二四高地」攻撃

道路の前方に山の稜線が見えるようになりました。全隊は静かに山麓に向かって進み、そして、山裾に着いて第十一中隊は右側に、第十中隊は左側に展開して、荷物は全部置いて薄暮を待ちました。稜線上からは敵がいるらしく声が聞こえてくる。

少し暮れかけてきて、いざ一戦を決行する時が来た。木立の中なので擲弾筒は射てなかったが、軽機の掩護射撃で中腹まで登り、それより一気に突撃を敢行し稜線上へ走り登った。

敵は軽機を発射した時、早くも退却して行ったものと思う。一発の弾も射って来なかった。稜線上には軽迫撃砲、自動小銃と弾薬等を残して敗走しているが、すでに暗くなって来て、様子はよく分からない。しかし、この「三五二四高地」を占領したことは確かである。西方かなたに、赤々と灯が見える。インパールだろう。

それから休む間もなく稜線上に、各々二メートル位の間隔を開けて壕を掘る。そして大分時間も経った頃、交代で山麓に置いてきた装具を指揮班

の位置付近に集め食事をすることとなった。そして黎明を利用して昼食、夕食のために枯竹を集めて炊さんの準備をして置くこととした。

ここが目的の「三五二四高地」だ。インパールへの道である。我々は「三五二四高地」の北側で少し低くなっている所を通って、この高地の前をインパール方面になだらかな斜面を真っ直に通って行く。夕べ見た明かりはやはりインパールの街であった。

距離にして、二千メートル位に見える。その中間位にある部落はヤイガンポピであろう。また、南北に見える道はブシエンプール―インパール―コヒマに通ずるインパール街道らしい。目前に、なだらかな斜面で木が一本も無い、田圃となりインパールの街へ道路が、集中している。

一番前の壕には田中分隊長が入るように壕が掘ってある。そこで座って前方を見ながら、「分隊長殿、十日程でインパールを制圧出来るでしょうか」と聞くも、慎重な班長は、「そうだなあ」「どうだろう」と確かな返事がない。

北方より烈兵団と第六十連隊と本田挺進隊が、南方より弓兵団と第五十一連隊と我が第六十七連隊の第一大隊が、東方より我が第六十七連隊の第二大隊と中西隊広岡隊が包囲態勢の配置が出来ている。しかし、友軍の飛行機が来ないし、戦車は無し、重砲火機も望み薄とのことで、このことは戦力的にも何としても気掛かりである。

左側に第十中隊が布陣した。ここがしばしの陣地であり住まいである。木を伐って来て全部の壕を偽装して敵状観察である。

敵の偵察機が何回となく飛来すると、敵の砲弾がはじめて、頭上を「シュルシュル」と音を残して、後方の山腹に煙弾が白煙を上げるようになる。その後、連続して十数発が頭上を飛び、後方の山に炸裂する。次は少し右方向へ、また次は左方向へ、何回となく頭上を越えて炸裂する。

砲弾が止まると、偵察機が飛来し、また時々は戦闘機の機銃掃射を射ち込んで行く。全くにぎやかである。弾着の測定と日本軍捜しである。必ず壕に入り、遮蔽物に身をかくす。頭上で音が聞こえる時は何の心配はない。

壕から頭を出して、前方を観察すると、ヤイガンポピでは人影が見え、自動車または戦車が二両位見える。そして、山麓まで来ては引き返して行く。このような事が二、三日続く。チンドイン渡河点では背にくい込む程だった食糧も少なくなってゆく。いつまで続くか、後方からの増援軍も、食糧の補給も全く無い、敵の動向の観察の日々であった。

先輩や同年兵等と、インパール攻略について、話し合いをする。しかし友軍の飛行機は、渡河以来一度も見えない。今完全に、制空権を握られている現状での行動には無理がある。重砲火機の援護も、期待出来そうもない等、種々意見交換をしながら、しかし結論は身を以って現地点を死守することとなる。あの死闘のインパールを眼前にした一時である。

**【解　説】**

体験記執筆者は、昭和十五年十二月一日、歩兵第二十連隊に入隊、中支派遣第十五師団歩兵第六十七連隊要員として十二月二十五日に内地を出発する。

連隊は昭和十三年再編され、八月に上海に上陸、南京に進出して同地の警備に当たっていた。執筆者は、福知山から宇品、揚子江を遡航して昭和十六年一月、南京軍官学校に入り第一期の教育を受け、そして中国戦線で教育と並行して江北の警備、作戦、討伐、泥濘の行軍、また清郷工作、初年兵教育、そして、浙韓作戦参加等中国戦線で活動した。

中支に約二年八カ月、次いでビルマ作戦である。サイゴン着、約一カ月の滞在で、プノンペンに入る。

ここからは列車でバンコックを通り、チェンマイに到着、日本製自転車の受領をする。銀輪部隊も、工兵隊が作った粗雑な山道の困難な行軍で、

自転車も故障続出ということ。マンダレー北部では、双牛車輸送部隊となる。

三月十五日、第十五師団はチンドウィン渡河に成功、連隊からは第三大隊（本多挺進隊）が抽出され、攻撃に参加、連隊主力は祭兵団（第十五師団）の指揮を離れ、第十五軍の直轄部隊として、ビルマ領内に進出したウィンゲート空挺部隊の掃蕩を命ぜられ、四月になって、第十五軍の直轄を解かれてインパールを目指した。そしてインパールを指呼の間に見る「三五二四高地」を占領する。西方のかなたに、赤々とインパールの灯が見えたという。

このウィンゲート空挺部隊とは飛行機に牽引された百機のグライダーと延べ六百機のダコタ機（短距離空輸用輸送機）でビルマ北部のインドゥから四十～七十キロの周辺四カ所に降下し、第十八師団の背後の連絡線を遮断していた。

本来、ビルマ駐屯の日本軍はビルマ防衛の任務に限定されていたが、牟田口第十五軍司令官の希望によって、ビルマ・インド国境を越えて連合軍の根拠地であるインパールを占領しようとしたのがインパール作戦である。

しかしここには何万の軍隊が進撃をするには大きな障害があった。それがインパールを囲む地形であった。

インパールを攻めるには標高千数百メートル・幅五十キロ・南北百六十キロのジュピー山系、ビルマ第二のチンドウィン河、最大の難所と言われたアラカン山系などがある。インパール盆地は、そのアラカン山脈の山間にあり、まともな道路はほとんどない。

チンドウイン河を渡河した本多挺進隊は、祭兵団の最右翼としてアラカン山脈を越え、二十八日にはコヒマとインパールの連絡路を遮断したが、六月となり、本格的雨期になって来た。こうした悪い条件の時、インパールを指呼の間に見る「三五二四高地」「四二四一高地」の攻撃をも展開している。



実際にインパールまでの行程は、ジャングル、河、山との戦いであり、兵たちの食料を担いでの行軍は、多くの戦記・類書に書かれているごとき悲惨の一語に尽きるものであった。